

スタディツアー報告

モンゴル・スタディツアー報告

～人とつながる経験が、未来へとつながる～

社会福祉学部

教授 山下 英三郎

1. 背景

2009年度のモンゴルスタディツアーは、2010年2月26日（金）から3月5日（金）までの日程で実施した。日本からの飛行便はすべてMIAT（モンゴル航空）である。冬季は週2便が成田空港からの発着であり、いずれも韓国仁川空港経由である。所要時間は、仁川まで約2時間、仁川からウランバートル市チンギスハーン空港まで3時間半である。

モンゴルではチベット歴のお正月（ツァガーン・サル）が終わると春が来たといわれるが、正月は2週間前に終わったというのに、この冬は寒さが厳しく午後11過ぎに到着した空港周辺は例年よりも雪が多く気温も低かった。今夜はやや気温が緩んだという話であったが、マイナス17度という外気温は我々の身体を鋭い刃で突き刺すような厳しさがあった。

今回のツアー参加者は、学生10名であった。学年のバランスもよく、1年生が2名、2年生が3

名、3年生が3名、そして4年生が2名という構成であった。サークルやゼミなどとは関係がない自由参加であるため、学年間でのつながりはなかったが、同じ大学に在籍しているという安心感あるためか、お互いにすぐに打ち解けグループとしての一体感はすぐに形成された。

モンゴルの経済状態は相変わらず厳しいが、ウランバートル市街地域ではここしばらく落ち着いていた観があった建築ラッシュが復活してきており、1年前にはなかった中層のビルがあちらこちらに姿を現していた。しかし、こうした活況も市井の人々の暮らし向きとはほとんど無縁だということであり、林立する建物群は経済格差の象徴のように思われた。

発展途上のエネルギー的な鼓動に触れて学生たちが何を感じ、何を学びとるかは定かではないが、わが国とは大きく異なる環境に身を置いて感じたことは、彼女らの意識や行動にきっとプラスの影響を及ぼすことであろう。

2. 研修

今年の研修は、ウランバートル市立特別訓練センター（児童養護施設）、緊急保護センター、新生児センター、国立教育大学ソーシャルワーク学部、第82高等学校、第72学校（小中高一緒）を対象として行った。これらに加えて当初予定に入っていなかった国立文化芸術大学へ訪問の機会を得たことも、学生たちの経験としては意義があったと思われる。以下に、各施設での研修内容を簡単に述べることにする。

1) ウランバートル市立特別訓練センター

当施設は、1997年にマンホールチルドレンの保護を目的としてウランバートル市によって設立された児童養護施設である。2002年から山下が交流



関係を開始し、以来年に2回訪問し、さまざまな形での支援活動を継続している。日本社会事業大学のスタディツアーとしてしての位置づけとなる以前から、学生有志が参加し施設に入所する子どもたちと交流をしている。その過程では、日本福祉医療機構の助成を受けて15人の子どもと3人のスタッフを招へいする事業や子どもたちのホームステイ、施設退所後の若者に対する就学支援などを行ってきている。そういった経緯があることから、当施設との関係はかなり緊密であり、子どもたちはいつも訪問を楽しみに待っている。

施設の訪問に関しては、施設内の見学はもちろんのこと、入所児童らに対するさまざまな生活訓練の実際を視察したり、芸術活動に触れたりするが、今回のスタディツアーでは学生たちの発案で、施設的全児童をグループに分けて一緒にケーキ作りをするというプログラムを行った。ケーキがまだ日常的に口にできるような経済状況にはない国で、しかも施設で生活している子どもたちにとっては滅多にない機会だったせいも、年少の子どもたちのみならず18才を過ぎた若者たち（施設には18才を過ぎた若者たちもいる）も熱心に作業に参加していた。お互いに限られたボキャブラリーしかないにもかかわらず、学生と子どもたちはグループごとに共同でカラフルなケーキを作り上げていった。ケーキはみんなで一緒に食べたが、後で気持ちが悪くなるのではないかと心配になるほど、口に頬張っている子どもたちが多かった。どの子の表情にも満足さが溢れていたことが印象的であった。

日本の学生の消極性がよく取り沙汰されるが、ツアーに参加した学生たちの様子を見てると決してそのような決めつけはできないと思う。彼女ら（参加者は全員女子学生）はケーキ作りだけではなく、ダンスや歌など全身を駆使して交流をしていた。その様子を見ていて、機会さえあれば学生たちは自主的かつ積極的に行動し発言するのだということを改めて確認した次第である。この積極性を、日常の授業で発揮させることができるような条件作りは、教員の力量にかかってくるのだ

ろうと思った。

施設では2日間を過ごしたが、子どもたちとの個人的な関係ができることによって、再びモンゴルの地に足を踏みしめることにつながる学生もいることだと思う。アルバイトのお金をせつせと貯めて3度も4度もモンゴルに通い卒業していった学生たちがいるし、今回の参加者の中にもそのような学生たちがいた。

そこには子どもたちが可哀想だからとか、支援しなくてとかいった動機ではなくて、純粹にあの子とまた会いたいという、人間関係のきわめてプリミティブな衝動に駆り立てられた行動がある。国際支援などといった大義名分を振りかざさなくても、会いたい子どもたちがいる、私を待っている子どもたちがいるという関係が生じることこそ大きな意味があることであり、支援というイメージを越えて人と人がつながり合うことが、結果的には子どもたちにとっての最良の支援になるのではないかと思われる。

2日間にわたる交流の後の子どもたちとの別れは、常に心を震えさせられる瞬間である。学生たちにとっては、彼女らの人生において二度と顔を合わせる機会があるかどうか分からないだけに、複雑な思いが去来するようである。だが、その複雑な思いこそが、人間関係の狭間に介在するソーシャルワーカーの活動の源泉となる。出会っていなかった子どもたちと、スタディツアーにおいて学生たちがたとえ短くはあれ、濃密な時間を過ごすことができたことだけでも、ツアーの目的は十分に達成されたのだと思う。



2) 緊急保護センター

当施設は、1996年に路上生活をする子どもたちを緊急保護するためのシェルターとして、ウランバートル市警察によって設立された。以前は、住所確定センターと称されていた。施設の名称が示すように保護された子どもたちの住所を確定し、家族のもとへ送り届けるという役割を担ってきた。ただし、住所が確定できなかつたり、家庭へ返すことが適切ではないと判断される子どもたちも多いことから、前述の特別訓練センターやNGOが運営する施設への入所に至る場合が少なくない。

もっとも多いときには、年間4,000人近くの子どもたちが保護されていたが、2000年代に入ってから、その数も減少し、2009年度は881人が保護された。この881人という数は延べ人数であつて実人数ではない。保護された子どもの中には、7、8年も路上での生活を続け、ひとりで複数回保護される子もいるため、保護された者の実人数はもっと少ない。ちなみに、われわれが訪問したときに保護されていた16才の少年は、これまでに80数回保護されているということであつた。もうひとりの15才の少年も60回を越える保護回数であるという。この15才の少年は、特別教育訓練センターに入居していたこともあつて、私のことを憶えており、帰り際には私の名を呼んでいた。この施設を訪ねると同様の経験をするることがあり、過去にもセンターで会った子たちと出くわしたことがある。一定の子どもたちは、保護されてから施設へ入所し、その後施設を飛び出し、再び緊急保護センターに保護されるというサイクルを繰り返している。

施設自体は100年以上前に建てられたものである。王族の妃の別荘だったものを改装して使用しているが、都市化の波が著しく、数年前まで周囲に十分なスペースがあつたのが、現在は壁際まで高層のアパートが迫っており、子どもたちが安心して過ごすには適切とはいえない環境となっている。

訪問したときには25人ほどの子どもたちが保護

されていたが、人数の減少に伴って施設側に余裕が生じたためか、生活技能を身につけさせるための取り組みがいくらかなされるようになったり、緊急保護施設ではあるが入所期間を最長1年間ほどまで広げたり、さらにはこのセンター自身が家庭復帰が見込めない子どもたちのためのグループホーム運営に取り組もうとしていた。

内装などかなり改善されたとはいえ、わが国の施設に比べれば劣悪だといつても過言ではない。しかしながら、子どもの権利擁護という観点に立つて施策を推進しているところは、むしろわが国より子ども本位の姿勢が明確ではないかと思われた。施設の性格上、子どもたちと深い交流をするということは難しいため、所長の講義を受け施設内を急ぎ足見学するという研修内容であつた。

3) 新生児センター

もともとは新生児・乳幼児のための国立の医療センターであつた。それが1990年代半ば以降、社会経済の混乱期に遺棄される新生児の数が増えたため、それらの子どもたちを保護する乳児院としての機能を果たすようになったものである。しかし、この2、3年の間に遺棄される子どもたちの数が減少したこともあつて、もともとの医療機能的な役割強化されつつある。100人を少し越える収容能力があり、かつては80%を越える子どもたちが遺棄された子たちであつたが、現在では40%程度がそうだという。

山下は2000年からこの施設を継続的に訪問して



いるが、当時は建物内部は傷みが激しく、照明も十分ではないため、廃墟のような印象があった。しかし、海外の助成団体の財政支援を受けて、現在ではまったく別の建物であるかのように清潔で明るい内装に変わった（このことは、特別訓練センター、緊急保護センターについてもほぼ同じことがいえる）。3才までの子どもたちが入所することになっているが、彼らが身につけている服も遊具も新しく、まさに隔世の観がある。

この施設も、子どもたちとの交流という点では無理があるため、所長の講義を受けてから施設内を見学するという研修となった。短い訪問ではあってもかつては子どもたちと触れ合う機会があったが、施設が整うにつれて子どもたちと視察者の距離は遠ざけられていくという感じもあって、複雑な思いにとらわれた。

4) 公立学校見学

モンゴルの学校制度は、日本のそれとは若干異なる。小学校が5年、中学校が4年、高校が2年制であり、中学校までが義務教育である。ほとんどの学校が、小中高同一敷地にある。日本流に言えば、小中高一貫教育ということになる。そのため、一校あたりの平均児童生徒数は2,000人を越える。今回はモンゴルスクールソーシャルワーク協会の協力をえて、二つの学校を訪問した。

a. 第81高等学校

ウランバートル市の中心部から少し外れた地域にあるこの学校は、モンゴルで一般に見られる学校ではなく特別な学校だということだった。どのような点が特別かという点、ここは10年生と11年生だけが在籍する単独の高校であるということ、ここに通う生徒たちは地域の中でも優秀とされる者たちだということである。全校生徒2,000人弱が在籍する大規模校であるが、生徒たちのほとんどが大学、あるいは専門学校に進学をするという。この高校で活動しているスクールソーシャルワーカーが中心となって学校の説明と案内をしてくれたが、深刻な問題が少ないから対応に苦慮する場面が少なく楽だと言っていた。



訪問は半日と限られていたが複数の教室に入っていく、いずれも短い時間であるにもかかわらず、学生たちと生徒たちの交流はスムーズであり、授業を中断してモンゴル国家を歌ってくれた教室があれば、ひとりの学生が席を立ってモンゴル民謡を歌ってくれたクラスもあった。また、体育の授業に飛び入り参加し、モンゴルの生徒たちと学生たちがバレーボールの試合を行うこともした。さらに、講堂のような場所で生徒たちが歌とヒップホップダンスを披露してくれたりもしたのだが、後で聞いたところ、彼らはお客さんが来たのならば自分たちの歌や踊りをぜひ見せたいといってきたことから実現された催しだったという。そうした生徒たちの屈託のない積極的な姿勢には感心させられた。

訪問全体を通して感服したのは、どの教室の教員も突然の訪問者たちによって授業が中断されることに対して不愉快な態度を表すこともなく、大勢の訪問者を受け入れてくれたオープンさである。わが国の高校で同様のことがあった場合、同じような態度が示されるだろうかと思われた。また、スクールソーシャルワーカーが生徒たちや教員たちと緊密な関係を築いていることを窺えたことも、わが国でスクールソーシャルワーク実践の展開を図るうえで少なからぬ示唆を与えてくれた。

大きな問題はないということであったが、休憩中に行った男子トイレの便器はどれも灰皿状態と化していて、吸い殻やマッチの軸などが大量に詰まっているという現実に直面して、問題に関する

認識も国が変われば異なるのだなということも感じた次第である。

b. 第72学校

学校訪問については、モンゴルスクールソーシャルワーク協会の会長のムフジャルガルさんに、最貧困地区にある学校の見学をしたいという希望を予め伝えてあった。そうした学校では、現在のモンゴルが抱えるさまざまな課題が見えてくるのではないかと思います、今後の子ども支援について何らかの手がかりをえることができるのではないかと考えてのことのであった。要望に応じて訪問先として選んでくれたくれた学校が、第72学校であった。

この学校は、ウランバートル市の中心部からは北側の郊外にある。この地域は、古くても10年程度しか経っていないバラックや伝統的住居であるゲルが丘の上まで隙間なく建て込んでいる。校舎は4階建ての建物が二棟あり、そのうちの一棟はJICAの支援によって建てられたとのことである。

こちらの学校は、午前中の高校訪問が思いの外長引いてしまったため、子どもたちの様子をゆっくり観察する時間がとれなかった。通りすがりに近い形の視察であったが、最も貧困な地区にある学校というイメージは学校の建物からも、授業中の子どもたちの様子からも窺うことはできなかった。子どもたちの身なりは清潔で、校舎内もきれいな状態に保たれていた。

それでも、両親が海外に出稼ぎに出かけていて十分に養育されていない子どもたちが少なくないという。スクールソーシャルワーカーの話では、厳しい家庭状況にある子どもたちが多い関係で、家族との面接や訪問、連絡調整などの比重が高いということであった。そのことは82学校とは明らかに異なる点であった。

この学校を訪問して興味深いと思ったことは、校長の話だった。彼女は一年ちょっと前にこの学校に着任したばかりだというのが、前任校で長いこと一緒に働いていたスクールソーシャルワーカーを呼び寄せたという。校長が新体制を築くに当たって、ソーシャルワーカーを呼び寄せること

ができるという柔軟なシステムがあることにも、またソーシャルワーカーの存在を高く評価していることにも驚かされた。悪くすると癒着関係に陥る危険性もあるが、協働体勢をスムーズにとることができる人材と共に学校環境を整備することができるのであれば、成果もあがるのではないかと思われた。

5) 国立教育大学ソーシャルワーク学部・国立文化芸術大学

児童養護施設などいくつかの施設を長年にわたって訪問し続けていると、施設の内部がかつてとは比較にならないくらい整備されてきたことが顕著に窺える。それに比べて、国立の施設である大学はあまり変わったとはいえない。国立教育大学には、海外との交流も活発で、外国の大学教員が長期滞在したり、教員が絶えず海外に出張していたりする。その資金は交流先の大学等が負担する。わが日本社会事業大学も、教育大学の教員をこれまで何人も招請し研修の機会を提供してきた。そうした国際交流の派手さに比較すると、設備は整っておらず、学生たちの勉学環境は整っているとはいいがたい。粗末な木製の机と椅子に大勢の学生たちが座って授業を受けている姿を見ると、教員招へいに費やされている資金をある程度設備・備品等の整備に回し、学生に対するサービスを充実させることはできないものかと思ってしまう。

a. 国立教育大学ソーシャルワーク学部

ここの交流も2000年から続いている。前述し



たように、教員を招へいし日本の大学や施設で研修する機会を提供し続けてきた。1997年に開設されたソーシャルワーク学部の教員たちは、いずれも若くソーシャルワークに関する経験もなく知識もない状態だったため、支援のニーズは高かったといえる。10年前は支援の手立てはそれほど多くはなかったが、現在ではアメリカの複数の大学、オーストラリア、オランダ、イギリスなど多くの大学が支援に乗り出し、教員たちに研修の機会を提供している。教員たちは頻繁に海外にで出かけるため、学生たちに対する教育は一体どうなっているのだろうと他人事ながら心配になることがある。

いつも学生同士の交流の機会を持つようにしているのであるが、日本の学生との交流に真剣な眼差しで臨む学生たちが多かったこれまでとは異なり、両国の学生がやりとりをしている間に私語を交わす学生たちがおり、彼らの態度にも変化が見られるようになった。それには、教員の度重なる不在など教育体勢が十分に整えられていないことも関係があるのではないかと感じられた。

そのことは我々を迎え入れるやり方にも現れていた。数ヶ月前から大学を訪問することは伝えてあり、受け入れてくれる約束をしていたにもかかわらず、訪ねた時には部屋には誰もおらず、15分以上も待たされた。やっとのことで交流をする教室へ通されたものの準備はなされておらず、しかも交流している間教員は立ち合わず、通訳にすべて任せてしまうという有り様であった。10年以上も交流を続けてきて、そのような対応をされたことは初めてであった。そのようなことから、この大学でのソーシャルワーカー養成教育の質に不安を抱かないではいられなかった。

決して望ましいとはいえない対応に接して、何が国際交流で、そして何がソーシャルワーク教育なのかについて、改めて考えさせられることになった。その疑問の中には、自分自身のこれまでの交流の仕方に対する批判的な省察も当然含まれてはならないのであるが……。学生たちへのスタディツアーのプログラムとしては、低調で

あったことは否めない内容であった。

b. 国立文化芸術大学

先述したように、この大学との交流は当初の予定にはなかった。突然訪問するという形になったのは、特別訓練センターに入所している若者が一年生として在籍していることから、彼女の学生生活を知らなかったためであった。その若者は、以前から支援を続けてきたこともあって親密な関係を保っており、保護的な立場で通学先の大学の様子を窺うという意味合いがあった。ツアーの合間を利用して急に訪問したため、大学側も我々がどのようなグループなのか分からず突然の来訪者に戸惑った様子であったが、それでも快く迎え入れてくれた。

19歳になる若者（女性）は、ポップスの歌手になりたいという夢を抱いている。文化芸術大学にはオペラからポップスまで幅の広いコースがある。この大学に入学するのはなかなか難しいのであるが、昨年無事に合格を果たすことができた。大学では、彼女の発声練習や歌の個人レッスンを見せてもらった。

レッスンの内容はともかく、彼女を指導する教師たちのハートの熱さと暖かさには教えられる点が多々あった。二人の教員と話す機会があったのだが、若者の境遇を十分に理解したうえで、彼女の才能をできるだけ伸ばそうと精力を傾けている様子が窺われた。特に、自分自身がかつてモンゴルの有名なポップスグループの歌手であり、現在も現役を続けているというモンゴルでは有名な女性は、その若者が将来歌の世界で生きていくことができるよう支援をするという覚悟を持って接していた。そして、われわれが若者を支援していることに対して、何度も「ありがとう」とお礼の言葉を発した。その言葉を聞いて、私は大学の教員として、自分が教える学生に関して誰かに心からお礼の言葉を述べるような関係を築いてきたらと思う。そのことを改めて考えたときに、その教員の心の豊かさを感じないではいられなかった。その教師には、学生に対する姿勢を教えられた気がした。

そして、他者を尊重することを重要視するソーシャルワークを教える大学で、対応のあり方に疑問を抱き、ソーシャルワークとは無縁の文化芸術大学でソーシャルワークの根幹に触れるような姿勢と言葉に出会ったことの皮肉さを思った。自分自身もまずい対応をする怖れは十分にあるので、他者のことをとやかく論じることはできないが、二つの大学でのエピソードは、学生たちにもソーシャルワークについて考える機会となったようである。

いずれにしても、われわれが人間関係について専門的知識と技量を学び研究している存在だとすれば、ソーシャルワークの非専門家である人々の献身や包容性に明らかに劣ることがない程度の力量は身につけておきたいものだと、文化芸術大学の教員の話聞いて改めて感じ入った次第である。

おわりに

スタディツアーに参加した学生たちの中には、何を学ぶか明確な目的もなく単にモンゴルへ行ってみたいという好奇心から参加したと正直に述べた者たちがいた。しかし、そうした学生たちが帰る頃には、児童福祉のあり方や国際協力のあり方について改めて深く考える機会になったと述懐していた。福祉ニーズのある現場へ足を運ぶことは、それほど大きな学びの機会となる。ただ一度だけの訪問に終わったとしても、出会った人々や福祉サービスのあり方、さらにはモンゴルという社会の現状、自然環境、それらの記憶は決して消え去ることなく学生たちの脳裏に刻印される。そして、それらが彼女らの思考と行動の枠組みを確実に広げ、ソーシャルワーカーとしての資質を高めることにつながるはずである。

寒い日にはマイナス20度にまで下がった厳しい低温の地での研修であったが、学生たちの胸には確実に暖かい灯が点せられたと感じさせるスタディツアーであった。

参加した学生たちの声

●モンゴルの首都ウランバートルの空は曇っていることが多く、空気が悪い。冬の冷えた空気を吸うと、むせてしまいそうになる。最初は、冷たい空気に体が驚いてむせてしまうのだと思っていたのだが、それは汚れた空気のせいだった。その原因のひとつは、工場の煙突から大量に排出される煙だ。ウランバートル周辺には高い煙突のある工場がいくつかある。その光景は、見渡す限りの大草原をイメージしてモンゴルを訪れた人にとっては、かなり衝撃的であろう。モンゴル人は遊牧民族で、広大な土地で家畜を飼って、その家畜の乳や肉を食べ、自然と調和しながら生きてきた。マイナス四十度にもなる真冬も古くからの知恵で生き抜いてきた。現在でも遊牧を続けている人たちもいる。今の流行語で言うと、伝統的な遊牧生活はとてもエコなものだと思う。そんなエコな国に、空気を汚す工場があることがとても残念だった。(3年女子)

●今回のモンゴル研修では、子どもたちの素直さに驚いた。初対面の私たちに話しかけてくれたり、手を引いてくれたり、過去に苦しい思いをした子達であることを忘れてしまうくらい明るくて、無邪気でかわいい純粋な心を持った子どもたちばかりだった。日本ではストリートチルドレンはいないと思うし、捨て子という言葉もあまり聴きなれない。

国によって違うということはモンゴルの社会状



況や国の働きによって子どもたちの置かれる環境が変化していくのだと思った。何の罪もない子どもたちが親に捨てられてしまったり、ストリート生活を強いられたり、苦しい生活をしていかなければならない状況下に置かれてしまうのは国が大きく影響しているであろう。また、貧困の差も多く存在するのではないか。(2年女子)

●今年、児童養護施設で「子どもたちと一緒に何か思い出になることをしたい」と学生たちで相談し、手作りケーキと一緒に作ることにした。それも大きなデコレーションケーキ作りに挑戦。どうなることかと心配している私たちをよそに、年齢の高い10代後半から20代の子どもたちが、率先して年下の子どもたちを仕切りながら必死になって作っていった。その姿は予想外で驚いたが、日本では当たり前の体験が年上の彼ら彼女たちにとってもおそらく初めての体験だったのだろう。極めて甘いクリームがたっぷりつけられ、数種類のフルーツやビスケットが飾られたケーキが出来上がった。口いっぱい頬張り、顔や手をクリームだらけにした子どもたちの満面の笑顔を見ると、年に一度や二度クリスマスのように訪れる私たちにできることは、ひとつでも子どもたちが新しいことに触れたり経験したりできることを増やしてあげられることではないかと思われた。そしてそれは、子どもたちと私たちが、同じ場所で、同じ経験を共にするだけでなく、共通の思い出ができ、それが私たちと子どもたちをつなげているのではないだろうか。さらにその思い出から生まれる子どもたちの笑顔は、私たちに「また来たい、会いたい」と思わせてくれ、再会につながるのだと思う。(4年女子)

●なぜモンゴル・スタディツアーに参加する人は、何度も行く人が多いのか不思議だったが、今年で少し分かったような気がする。去年と2回目の今年では、感じるものが違った。一度参加すると2度、3度と参加してしまう魅力がモンゴル・スタディツアーにはあるだろう。学ぶことも大事なこ

とだが、それだけでなくモンゴル・スタディツアーには人と人の繋がりがある。だからこそ、1回参加して見てきて終わりではなく、また行こうと思ってしまうのではないだろうか。百聞は一見にしかずと、1度行ったからいいやで終わりにしてはもったいないと思った。私は今回参加して、1回だけでは知らないままだったことがたくさんあったことに気付いた。何度も行く、続けることで見えるもの、感じることは違ってくる。2回目の参加でさらに、もっと知りたい、また会いたいまた行きたいと思った。そして、改めて人との繋がり温かさを感じ、繋がりを大切にしていこうと考えさせられたモンゴル・スタディツアーだった。(3年女子)

●今回のこのモンゴルの旅は、正直何かを学びたいという気持ちよりも、モンゴルに行ってみたいという気持ちの方が強かったが、実際に行ってみたら考えさせられることが多くあり、自分の知識のなさに幻滅するとともに、もっとモンゴルのことや児童福祉について学びたいと思うようになった。夜のミーティングでも幅広い年齢の人の感想や意見を聞くこともでき、本当に勉強になった一週間だった。モンゴルの児童養護施設を始め小中学校大学、乳児院、緊急保護センターで出会った子供たち、旅の間一緒にいてくれた通訳のムンフさん、運転手のガンバ、みんな本当にいい人たちばかりで別れがとっても辛かったが、一週間という短い旅の中、多くの知識と素敵な出会いを得て、本当に来てよかったと思う。また今年の夏も施設の子供たちから元気をもらいに、さらにモンゴルの児童福祉について学ぶためにモンゴルに行きたい。

●今回のモンゴルのスタディツアーは、わたしにとって一生忘れることのできない貴重な経験でした。行く前は食事のこと、トイレのこと、犯罪のことなど不安でしたが、実際行ってみると行く前以上にカルチャーショックが大きかったです。しかし、このツアーに参加していなかったら知ることのできなかつた現実を知ることができ、出会

うことができなかつた人々と同じ時間を共有できたことを、とても嬉しく思います。これからも、モンゴルの子どもたちにはきらきらとした笑顔を忘れずに、未来に向かって明るく進んでいって欲しいと思います。 (2年女子)

マレーシア スタディツアー報告

2010年2月23日～28日

社会福祉学部

准教授 藤本 ヘレン

日本のソーシャルワーク人材育成において、多文化ソーシャルワーク教育が求められてきている。移民のための社会支援の必要性が明らかになってきているが、移民特有のニーズに対する理解は未だ欠けている。

日本社会事業大学では、東南アジア諸国へのスタディツアーを行っている。多文化的な対応能力を身につけるためには、第一に多様性を体験することである。今回のマレーシアへのスタディツアーは、学生が文化的及び社会的多様性が高い社会の一つを直接体験できる機会となった。



マレーシアは、非常に多様な多文化社会であり、社会福祉の制度は日本と大幅に異なる。人口は、マレー系（イスラム教）、中国系（キリスト教、仏教、道教及び無宗教）、インド系（イスラム教及びヒンズー教）の三系統の人が多い。訪問した全ての施設に、三系統のスタッフ及び入所者がいた。日本の状況を念頭におき、ペナンへのスタディツアーには二つの目標を立てた。

1. マレーシアの多元主義社会の性質と複雑性を直接体験すること。
2. 多元主義社会における多文化ソーシャル